

中
勘
助

小
品
四
つ



小品四つ

秋 草

これはもうひと昔もまえの秋のひと夜の思い出である。さっさつと風がたつて星が燈ともし火のように瞬またたく夜であつた。身も世もないほど力を落して帰ろうとするのを美しい人が呼びとめて

「花をきつてさしあげましょう」
花はな鋏はさみと手燭てしよくをもつておりてきた。そして

泳ぐような手つきで繁しげりあつた秋草をかきわけ、しろじ
 ろとみえる頸筋くびすじや手くびのあたりに蝗いなごみたいに飛びつ
 く夜露、またほかげにきろきろと光る蜘蛛の巣をよけて
 右に左に身を靡なびかせつつひと足ぬきに植込みのなかへは
 行ってゆくのを、かわつてもつた手燭をさしだして足も
 とを照しながらかたみに繁みのなかへ溶けてゆく白い
 踵かかとの跡をふんでゆけば、虫の音ははたと鳴きやみ、草
 の茎ははねかえつてきてちか人と人を打つ。咲きみだれた
 秋草の波になかば沈んだ丈高い姿ははるかな星の光とほ
 のめくともし火の影に照されて竜女のごとくにみえる。

おりおり空から風が吹きおちて火をけそうとすると

「あら」

と大きな目がふりかえってひとしきり鋏の音がやむ。驚かされた蛾がは手燭のまわりをきりきりとまわって長い眉をひそめさせる。そんなにして無言のままに紫苑しおんや、虎の尾や、女道花おみなえしや、みだれさいた秋草の花から花へと歩みをうつしてゆくのを、私は胸いっぱいになって、すべての星宿が天の東からでて西にめぐるよりも貴いことに眺めていた。ここにあるいくすじの細いリボンの、白と、黄と、淡紅と、ところどころに青いしみのあるのはその

おりおりにきって束ねてもらった草の汁である。さりながら私はこのうちのどれがその夜のものであったかをおぼえていない。

小箱

ここに今はいない妹の手細工のガラスの小箱がある。六枚のすり硝子の合せめをクリーム色のリボンでびしりとしめあわせたもので、ひだ襷飾りがしてある。あんなに美

しい指をもちながら兄弟じゆうでの無器用で、常づね私
にからかわれて泣き顔をした妹もこればかりは笑われま
いと一所懸命こしらえたものか、たいそう手際よくでき
ている。いつものとおりけなしけなしほめてやったらそ
れでも嬉しそうにちよつと首をかしげたことを思いだ
す。なかにいれておいたいろいろな貝はいつかいらまじ
ってどれが誰のとも見わけられないのはとりかえしのつ
かぬ寂しい気がするけれど、いずれも私にやさしく親し
い指の拾いあつめたものとおもえばなかなか思いなぐさ
むところもある。

ここなる二ひらの帆立貝ほたてがいのひとつは藤紫ふじむらさきに白をぼかし、放射状にたてた幾十の帆柱は無数の綺麗な鱗茸りんじようをつらねて、今しも迸ほとばしりいでた曙の光がいろいろの雲の層かさねに遮おさられたようにみえる。他のものは暗紅に紫黒と海老色の帯をまとつて、ところどころ鳥糞ちようふんにた白い斑点がついている。これは夕ばえの天の姿である。これらの二つをならべてその蝶つがいをからだとみれば、それはまた二羽の孔雀の競いかに尾羽根をひろげたさまである。美しいかさねをきた子安貝、なないろのさざ波のよるとこぶし。巻貝、笠貝かさがい、雲がた貝。月日貝は幸ある

子かな。くれないの朝日と、淡黄の夕月と、貴い父はは
 のかいなに抱かれて南の海に眠るといふ。あわれいみじ
 きこれらのものよ。紅白の珊瑚さんごの林に花とちり実と落ち
 た貝の殻は、竜の乙女が玉をみがいた踵かかとにふまれて、
 その足指の白さに、爪のうすべに、髪かみの紫に、瞳のみ
 どりに染みてこの麗しい色は得たのであろう。わたつみ
 の海の千ちひろの底にしておのずからわが身にふさえる家
 をもち、ほどよい青の光の国に、あるいは螺鈿らでんの穹窿きゆうりゆう
 のしたに、またはひとつ柱の迷宮のうちに、心しずかに
 夢みてすごす海のうからをねたく思ふ。

折紙

私はまたその妹とすごした海岸の夏をわすれたことはない。あの松原のなかで潮風の香をかぎ松をこえてくる海の音をききながら二人して折物をして遊んだとき、円窓のそとにはなぎの若木がならんで砂地のうえに涼しい紺色の影を落した。妹はふっくらと実のいった長い指に折紙をあちらこちらに畳みながらふくふくした顔をかし

げて独り言をいったり、たわいもないことをいいかけた
 りする。つやややかな丸鬘まるまげに結ゆってうす色の珊瑚の玉をさ
 していた。桃色の鶴や、浅葱あさぎのふくら雀や、出来たのを
 ひとつひとつ見せてはつづけてゆく。私は妹と向きあつ
 てなんのかのとかまいながらやつとのことれんげで蓮花とだま
 し舟を折った。ここにあるひとたばの折紙はなつかしい
 そのおりの残りである。藍や鶺鴒ひわや朽葉くちばなど重りあつて縞
 になった縁をみれば女の子のしめる博多の帯を思いだ
 す。そのめざましい鬱金うこんはあの待宵まつよいの花の色、いつぞや
 妹と植えたらば夜昼の境にまどろむ黄昏たそがれの女神の夢のよ

うにほのぼのと咲いた。この紫は^{ほたるぐさ}蛍草。蛍が好きな草
ゆえに私も好きな草である。私はこんなにして色ばかり
見るのが楽しい。じつと見つめていれば瞳のなかへ吸い
こまれてゆくような気がする。ようやく筆の持てる頃か
ら絵が好きで、使い残りの紅皿を姉にねだって口のはた
を染めながら皿のふちに青く光る紅を溶^{とか}して^{あぶ}虻や蜻蛉^{とんぼ}の
絵をかいた。そののちやつとの思いで小さな絵具箱を買
ってもらい一日部屋に閉じこもってくさ草紙の絵やなど
写したが、なにも写すものもなく描くものも浮んでこな
いときは皿のうえにそれこれの色をまぜてあらたに生れ

る色の不思議に眼をみはり、また濃い色を水に落して雲の形、入道の形に沈んでゆくのに眺め入った。さてもこの綺麗な色紙はいつの日かまた妹の指に置まれて鶴となり、ふくら雀となるであろうか。

あしべ踊

ここに葦あしの葉の模様のついた淡卵うすたまご色の粗末な小皿がある。これはさる頃の葦辺踊りのときのものでいまだに

うす赤く菓子のがついでるが、私は近頃ながら病
床にいたあいだこれをなつかしいものにして枕もとにお
き、そのおりの旅のみやげの春日かすがの鹿をならべてあかず
眺めていた。皿のふちにずらりと鼻をならべた赤や茶や
紺青こんじょうやの鹿の輪は葦辺踊りの美しい子たちの姿である。
まず私はほどよい行燈あんどんのあかりに照された座敷に人形の
ように坐つてた点茶たゆうの太夫と、この菓子皿を手にうけて
金魚みたいに浮いてきたかわいい子を思ひだす。それか
らさつと三方にあがる幕と、雨のように降りかかる三味
線の音と、豊ゆたかにまるらかな立唄たてうたの声と、両花道からし

ずしずと鱭ひれをふりながらあらわれる踊り子の緋鯉ひごいの列と
 ……とりわけ鮮あざやかに幻に残ってるのは、錦絵から飛んで
 出たような囃子はやしの子たちの百羽の銀鳩ぎんぼとが一斉に鳴くよう
 に自由に生きいきと声をそろえた　ほう　いや　のかけ
 声、いい姿勢しゆもくに撞木しゆもくをとってきりりんきりんと緩ゆるやか
 にうち鳴らした鉦かねの音である。その囃子かみがたのまんなか
 太鼓を打った花形の子は上方風かみがたの柔和な顔に梅幸ばいこうに似た
 うけ口うけぐちをしていた。私はその夜の唄をしるしたたとう紙
 を忘れずにもって帰った。二つ折の紙の表に銀泥ぎんでいの水の
 地の天には桜の花を、地には紫の土を染めだして、だら

りに結んだ舞子の後姿がついている。その鬘たばと襟えりのあいだには白い頸筋、鬢びんのしたにはふつくらしした頬がみえて、帯の模様は青柳に燕である。またスペードの2の裏にその夜の踊り子のなかのたてももの写真のついたトランプもある。それはさしかざす絵日傘のかげになまめく顔や顔のなかで子安貝の背に彫ってはめたようなすすしい眼まなざしをした子で、伊丹幸いたこうの□□□という。

たとえばこの胸の冬の空にたまたま過ぎてゆくこれらの暖い雲の影は常に憂鬱ゆううつな私をしておぼえず寂しくほほえませることがある。孟宗もうそうの枝に寐ねるあの鳩と、私と、

どちらがより多くの夢をもつであろうか。

大正二年稿

日本文学電子図書館

小品四つ

著 者：中 勘助

制作者：宮澤一郎

底 本：「中勘助随筆集」

岩波文庫、岩波書店

1985年6月17日 第1刷発行



日本文学電子図書館